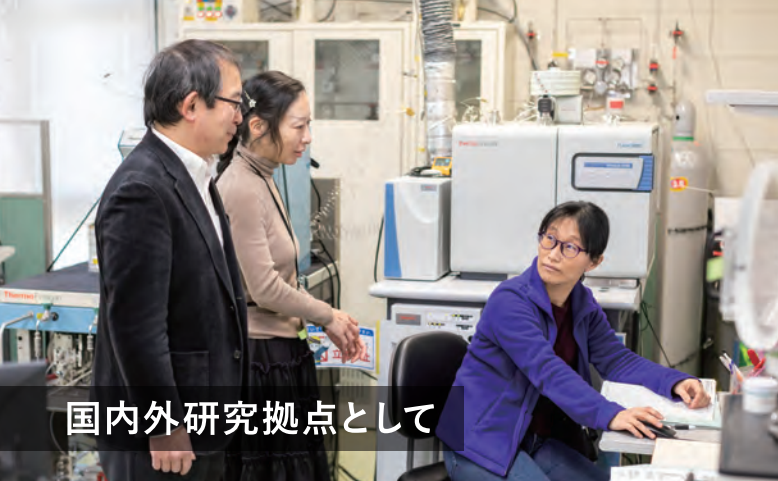




国内外研究拠点として

地球研では、現在実施中のものを含めてこれまで累計52本のプロジェクトを実施してきました。その中で構築した学術資源を活用し、国内外の地球環境研究の拠点としての中核機能を果たしています。

国内外の研究機関等との連携

地球研では、全国29の研究機関や行政機関等と学術交流等に関する様々な協定を締結しています。また、海外16カ国、26の研究所・研究機関等とも覚書および研究協力協定を結び、研究や教育の充実・発展に取り組んでいます。 ※2025年4月1日現在

実験施設

大学共同利用機関として、個々の大学では整備・運営が困難な最先端の大型装置などの実験設備を配備し、研究や実験手法の開発、貴重な学術データなどの研究資源を収集・活用しています。地球研が実施しているプロジェクトや同位体環境学共同研究に係る国内外の研究者が利用しています。

同位体環境学共同研究事業

水・大気・生物・土壌など生態系を構成する種々の要素や、人間の活動とその歴史など、あらゆる人間と自然の相互作用環のなかには、元素の安定同位体比という「指紋」が内在しています。地球研では、この安定同位体比の分析を軸とした研究を「同位体環境学」と呼び、全国の研究者との共同研究を2012年度より進めています。

大学院教育

2023年度に、地球研に総合研究大学院大学先端学術院先端学術専攻「総合地球環境学コース」（博士後期課程）が設置されました。地球研は、博士の学位をめざす大学院生の指導を通じ、地球環境問題の解決に資する研究をおこなう若手研究者の育成に貢献します。

さらに、地球研は、グリーンナレッジセンター、フューチャー・アースセンター、京都気候変動適応センター、寄附研究部門として上廣環境日本学センターを置くなど地球環境問題解決に貢献する各種研究活動や研究成果等の国際発信を行っています。



人と自然、
地球環境問題の根源は、
人間文化の問題にある。

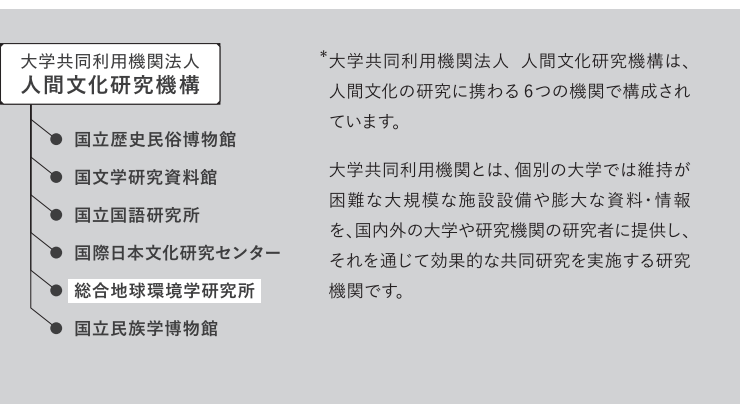
総合地球環境学研究所 所長
山極 壽一

現代は、人間の影響が顕著に地層に残り始めた「人新世」と呼ばれます。地球温暖化、海洋汚染など、地球環境の変化は人間にとって大きな脅威となりつつあり、その対策は待ったなしの急務となっています。

ただ、地球には多様な環境があり、私たち人間も多様な文化に生きてきました。環境問題を解決するにはその多様性に基づいて新たな人間の暮らしを創造する必要があります。

総合地球環境学研究所(略称:地球研、英語名:Research Institute for Humanity and Nature)は、地球環境問題を文化の問題としてとらえ、研究者ばかりでなく、自治体や市民の幅広い参加を呼びかけながら解決策を探る超学際研究を実施しています。2001年に創設され、2004年には大学共同利用機関法人 人間文化研究機構*の一員となりました。

文化とは、地域の自然環境に根差した衣食住に反映される人々の暮らしです。そこに息づいている伝統知と、地球環境を改善するための環境倫理を調和させ、分野を超えた学際的なアプローチから豊かな未来へつながる新しい文化と暮らしを創造することが地球研の大きな目標です。



地球研は京都市北部、すぐき菜が名産の上賀茂にあります。

地球研マスコット キャラクター 地球犬 ▶



交通アクセス

- 地下鉄烏丸線
京都駅→(20分)→国際会館駅→京都バス 40・特 40系統「京都産業大学ゆき」または50系統「市原ゆき」または52系統「市原経由貴船口・鞍馬・鞍馬温泉ゆき」(6分)→「地球研前」バス停下車すぐ
- 京阪沿線
出町柳駅→叡山電車鞍馬線(17分)→京都精華大前駅→(徒歩10分)→地球研
- 上賀茂方面より
京都バス 32・34・35系統に乗車し、「洛北病院前」バス停下車徒歩10分
もしくは、「京都産業大学前」バス停から、京都バス 40・特 40系統「国際会館駅ゆき」に乗車し、「地球研前」バス停下車すぐ

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4
TEL.075-707-2100(代) FAX.075-707-2106
<https://www.chikyu.ac.jp>



各種 Web媒体にて情報の発信をおこなっております。



Research Institute for
Humanity and Nature
大学共同利用機関法人
人間文化研究機構 **総合地球環境学研究所**

このリーフレットは再生紙を使用しています

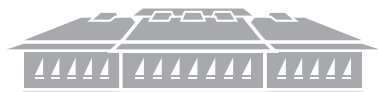


2025

Photo: Wai Phyo Maung



Research Institute for
Humanity and Nature
大学共同利用機関法人
人間文化研究機構 **総合地球環境学研究所**





地球研の研究

プログラムープロジェクト制

地球研では、地球環境問題にかかわる優先的に取り組むべき重要な課題を「プログラム」として定めています。研究プロジェクトは3つのプログラムのいずれかに属し、各プログラムの課題に沿って社会における協働実践を通じながら具体的な問題に取り組んでいます。

環境文化創成プログラム

土地利用革新のための知の集約プログラム

地球人間システムの共創プログラム

プロジェクト方式による流動性の高い研究組織

地球研の研究プロジェクトは、異なる分野の研究者が社会と協働して研究を行い、その過程で内部審査と外部評価を経ながら、研究内容を深化させ、練り上げていくシステムに特徴があります。

国際公募により提案された研究課題は、インキュベーション研究(IS)、予備研究(FS)の準備期間を経て、実行可能性が認められたものが研究プロジェクトとして採択され、3～5年間のフルリサーチ(FR)を実施します。

これまでに45の研究プロジェクトが終了しており、現在7つの研究プロジェクトが進められています。



分野を超えた総合的な研究

人文学、社会科学、自然科学など分野を問わず多様な研究者が一堂に会して研究を進めています。研究室は扉のない全長150mの大空間になっており、既存の学問分野や領域を超えた研究者同士の連携が、日常的におこなわれています。

社会と協働した課題解決型アプローチ

地球研の研究プロジェクトは、国内外の数多くの地域で研究活動をおこなっています。地方自治体との学術協定の締結など、さまざまな形で地域の方々と共に研究を進めています。

環境文化創成プログラム

プログラムディレクター：松田 素二

地球環境問題の解決のために、先進的な科学技術に頼るだけでなく、科学と文化の接合を通して新しい価値観と生き方の創造に取り組みます。

2024-2028年度 <FR2>

都市ー農村の有機物循環とそのシステム構築に関する実践研究ー地域の価値観と科学的知見の融合をめざしてー

プロジェクトリーダー：大山 修一

有機物循環プロジェクト

自然から得たものは自然に戻すという理念のもと、アフリカやアジアの各地、日本において都市の生ゴミを荒地地や農地へ戻し、環境修復や農業生産の改善に資するバイオマス循環システムの仕組みを作ります。西アフリカ・サヘル帯において住民や自治体・政府と連携し、25年にわたり都市の有機性ゴミを使って荒地地を緑化し、住民生活の改善に貢献しています。

主なフィールド

日本(京都をはじめ各地)、アフリカ(ニジェール、ウガンダ、ザンビア、ガーナ、ジブチ)



2024-2028年度 <FR2>

科学とアートの融合による環境変動にレジリエントな在来知の高解像度復元と未来集合知への展開

プロジェクトリーダー：渡邊 剛

SceNEプロジェクト

地球環境問題を自分ごとにするには？本プロジェクトではサンゴの年輪による高解像度の環境復元を基盤に、ヒトと自然の関係から生まれた地域固有の在来知と地球規模の変動に埋もれた地域課題を見出します。アートを媒介として地球環境問題の自発的な解決に向けた地域社会のあり方を議論し、共感を得やすい地域社会像を得るための未来集合知を創造します。

主なフィールド

喜界島、奄美群島



2025-2029年度 <FR1>

地域知と科学との対話による公正で持続的な狩猟マネジメント

プロジェクトリーダー：本郷 峻

Fashloksプロジェクト

熱帯雨林における野生動物の過剰狩猟に国際的関心が集まるなか、長年にわたり狩猟を続けてきた人々の生活と文化も危機にあります。この「野生肉危機」の解決のためには、地域住民と保全機関の相互理解が必要であり、それは地域知と科学との対話を通してはじめて成しえます。私たちは両者が対等な立場で協力する「共同製作研究」を進め、地域主導の持続的狩猟管理システムを構築します。

主なフィールド

カメルーン、コロンビア、マレーシア(サバ州)、ガボン、コンゴ民主共和国



土地利用革新のための知の集約プログラム

プログラムディレクター：荘林 幹太郎

社会経済活動や土地利用の変化が及ぼす地球環境への影響を緩和したり、そうした影響に適応したりするため、学際的、超学際的な方法で土地利用を根本的に改革する方法を模索します。

2022-2025年度 <FR4>

社会生態システム転換における衡平性：熱帯森林フロンティアの政治・権力・不確実性

プロジェクトリーダー：WONG, Grace

FairFrontiersプロジェクト

中央アフリカや東南アジアの熱帯地域では、フロンティア(開拓地)での森林破壊と土地利用の激化により、景観や生業または地域住民のウェルビーイングの急速な変容が起きています。このことはグローバルな環境問題であると同時に地域の社会・生態システムの危機でもあります。このプロジェクトは、政策分析と事例研究をおこない、森林と農業の境界地域での変容がより衡平で持続可能な開発となるための条件を明らかにします。

主なフィールド

東南アジア：インドネシア、マレーシア(サバ州、サラワク州)、ラオス
中央アフリカ：カメルーン、コンゴ民主共和国



2025-2028年度 <FR1>

里山のつながりをとりもどす：コミュニティとつくるレジリエントで“ネーチャー・クライメートポジティブ”な土地利用の未来

プロジェクトリーダー：DWYER, Janet

SATOCNNプロジェクト

ヨーロッパと日本の里山における、人と自然のネーチャー・クライメートポジティブで強固な相互関係を追求します。歴史ある自然的価値の高い文化的景観は、その特性や、保全するための地域知への理解が共有されず危機に瀕しています。地域と連携して異なる市場や政策、ガバナンス条件の中で、レジリエンスを高める新しい方法をリビング・ラボで検証し、生物多様性や気候に関する世界的目標達成に不可欠な多面的土地利用を確立します。

主なフィールド

英国、ヨーロッパ(ポルトガル、スウェーデン)、スイス、日本における里山や自然的価値の高いランドスケープ



2025年度 <PR>

制度、価値、世界観の探究を通じた多元世界的土地利用の探究(田村 典江)



地球人間システムの共創プログラム

プログラムディレクター：谷口 真人

複雑に絡み合う地球環境問題を解決するために、人と社会、自然との連環を明らかにし、ステークホルダーとの共創を通じて未来社会のあり方を追求します。

2022-2026年度 <FR4>

陸と海をつなぐ水循環を軸としたマルチリソースの順応的ガバナンス：サンゴ礁島嶼系での展開

プロジェクトリーダー：安元 純

LINKAGEプロジェクト

このプロジェクトでは、琉球弧や西太平洋の熱帯・亜熱帯に位置するサンゴ礁島嶼系において、陸と海の水循環を介したつながりや、暮らしの中で育まれてきた生物と文化のつながりや多様性、多様な資源のガバナンスの規範・組織・制度の変遷や重層性を解明します。得られた成果のつながりを可視化し、陸と海をつなぐ水循環を軸としたマルチリソースの順応的ガバナンスの強化をめざします。

主なフィールド

琉球諸島、ワカトビ諸島、フィジー諸島



2023-2027年度 <FR3>

人・社会・自然をつないでめぐる窒素の持続可能な利用に向けて

プロジェクトリーダー：林 健太郎

Sustai-N-ableプロジェクト

窒素は肥料・原料・燃料として人類に大きな便益をもたらします。しかし、我々の窒素利用は意図せずに窒素汚染を引き起こし、人と自然の健康を脅かしています。このプロジェクトでは、未知が多く残る窒素の動態を解明し、窒素利用に伴う環境への負荷と影響を定量化し、窒素利用の便益・脅威や対策・行動変容の効果を評価し、持続可能な窒素利用の実現に向けた将来設計をおこないます。

主なフィールド

日本、世界



2025年度<FS>

- ・儀礼と正負の関係価値から考える人間・文化・自然の連環と共創(中臺 亮介)
- ・Towards an Ethical Economy: Addressing the Impacts of Commodity Trade and Consumption on Indigenous Land and Survival (NGUYEN Tien Hoang)
- ・陸から海への水・栄養塩フットプリント解析とターニングポイントへの適応策：ヘルシーなアジア沿岸域の実現に向けて(張 勁)
- ・Disasters and Development in East Asian Regionalism in the Anthropocene (ITO Takeshi)
- ・Social-Ecological Accelerations (SEA) as the key to understand the 20th-c. Great Acceleration and its possible futures: learning from case studies in European and Japanese Environmental History (IZDEBSKI, Adam)
- ・シチズナレッジを活用した気候変動への態度行動変容の可能性(馬場 健司)